

『高橋氏文』と実践

「料理」する宮廷宗教者たち

三品泰子

1 九世紀の「氏」としての表現行為

八世紀末から九世紀初めにかけて、職（ポスト）をめぐる氏族間の対立が噴出し、家牒・家記・氏文といった、それぞれの氏族が出自や職の起源を書き記したテキストが、集中的に宮廷に向かつて記述され公開された。それは、氏々が自らの根拠となる起源を語ることに躍起になっていった一時期、そして「氏」としての様々な表現行為であふれかえった一時期だったと言える。

ただし、職とそれを支える起源神話が、氏族間で対立しているということ自体は、現象として見た場合、決して八世紀末から九世紀初めという一時期に固有なものではない。ただ古事記・日本書紀では、氏族の乱れを正した允恭天皇の盟神探湯や、諸家のもっている帝紀・本辞の虚偽を改めるための天武天皇の古事記成書化など、氏々がそれぞれに主張する氏の起源を、天皇が統合して、混乱を平定したかのような、叙述の仕方をとっている。氏々の多様性を内包しつつ、王権のシステムが完結しているかのように叙述しているのが、記・紀のやり方である。

それに対して八世紀末から九世紀初めにおいては、氏族間の対立という現象が、氏と氏との競い合いという表現行為のかたちをとっており、記・紀の氏族に関する叙述と氏文とを、氏の古伝承として同じレベルで捉える、従来の氏族伝承論が目を向けてこなかったことだが、その点がこの時期の固有性なのである。あえて氏と氏とが競い合うという表現行為を全面に押し出しているわけだ。

その一端として、氏々が主張する起源が「正しい歴史」かどうかをめぐって問題になり、天皇の判決の勅が出されたり、撰氏族志所設置、本系帳提出、姓氏録作成と続いていくのだが、ことはただ単に、文献化された「歴史」の競合としてあつただけではない。⁽¹⁾

例えば、挽歌が氏関係の内に向かつて詠まれるようになって、⁽²⁾氏が自分たちにとっての祭祀として氏神祭祀を作り出し、それ以前の氏による在地に根ざした神祭祀と区別して、それを「私祭祀」と名乗るのも、氏の成立とともに古くからある普遍的なものではなく、この一時期に限って初めて行われるようになったことなのだ。⁽³⁾

つまり、氏の内に向かつて表現するということは実は新しいことで、また氏を外に向かつて表現するとき「私」として打ち出すのも、この一時期の特徴のようだ。それは、『令集解』のように家々の学説が複数集められ組み合わされた注釈書の中で、他家の学説に対する異説が「私云く」と記されており、説を競い合う（論争）という局面で、「私」が浮上してきたことともつながるだろう。

このように、氏文といういわば神話を書くことと、挽歌を詠むことと、氏神祭祀を行うことと、学説を論じること。これらはジャンルということでは、それぞれ全く相異なる種類の表現行為であるが、八世紀末から九世紀初めという一時期に、それ以前とも以後とも違う、九世紀の「氏」としての表現行為のあり方を新たに作り出し実現しているという点で、まさに同時多発性を指し示していると言えよう。

このような、新たな「氏」の表現のやり方を作っていくムーブメントの中でも、やはりとりわけ注目すべきは、競い合うという表現のかたちであろう。なぜなら、この競合とは、当事者の独りよがりでも言える自己展開的なあり方——それは、裏を返せば、当事者がいかに自分にとっての世界像を作り出していくかという問題である。——が、最も露出して現れてくる局面だからである。そして、まさにこの点を重視することによって、それを逆にマイナスの要素として受け取ってきた従来

の氏文論と、大きく分かれていくことになる。

すなわち、古事記研究の側からは、古事記も氏文も、同じく律令制に対する違和感・危機意識をもって書かれたものである

が、氏文の場合、当の一氏族にとってしか切実さをもたない、きわめて限定的な政治的実利性からきたもので、そのために古事記ほどの魅力を持ちえないと言われる。また、氏文研究の側からは、新しい律令制度の確立に対応すべく、古い弱小氏族たちのポストをめぐる対立が先鋭的に顕在化してくるといって、氏文成立の歴史的背景について、律令体制と氏族との緊張を孕んだ関係を象徴するテキストとして、氏文を取り上げる。

この、一氏族にとってしか意味のない政治的実利性だとして排する態度と、律令体制と氏族との緊張関係という巨視的な視点をあえて強調する態度とは、結局のところ、表裏の関係にあると言えよう。それは、競い合っている当事者にとって、その競り合う一点とはどのような意味をもっていたのか、もしくは、どのような意味をそこに見い出そうとしていたのかということ、両者とも見ようとしていないからである。今まで「政治的実利性」としか呼ばれてこなかったものの内実こそ、当事者の論理が露出する競合の局面であった。

氏々にとってこのような競合が実現される場として、九世紀の「宮廷」があった。そこで、氏文の中でも特に「高橋氏文」を取り上げ、高橋という氏にとっての九世紀の「宮廷」について論じていこう。

2 「宮廷」に向かう氏文

まず、氏々がそれぞれの職掌をもって天皇に奉仕するというのが前代以来であるにもかかわらず、九世紀の「宮廷」が氏々の競合の場になったのは何故か、という問題から考えてみよう。

すなわち、高橋氏や安曇氏のような前代以来の氏々が、内膳司の負名氏として独自の職掌をもって仕えるための活躍の場として、天皇の家政機関である内廷官司や、令制以前の祭祀形態と奉仕氏族で行われる伝統的な天皇親祭祀が、新たな国制機構の中に温存されていた。この温存のためのシステムが整備されたのは、平安初期になってからのことである。つまり、氏々がそれぞれの職掌をもって官司や宮廷祭祀で奉仕するという、一見、前代以来の氏の活動の仕方と変わりがないように見えることでも、実はこの一時期の固有性として把握できるのである。

それは、内蔵寮や内膳司といった、天皇親祭祀を財政的に支える機関の機能が拡大したというような、文字通りのシステムのことだけではない。延喜内膳司式や宮内省式に祭祀への関わりが大きく認められるように、内廷官司がいかに祭祀と関わりをもつかという、関わり方を作り出していった時期だったのだ。つまり、氏々の職掌が新しい機構の中で「温存」されていたとしても、その「温存」とは、単なる旧慣維持ということではなく、九世紀の「氏」が自らの職掌を宮廷の中でいかに実現させるかという、この時期の「氏」としての表現行為と連動したものだ。

このような、天皇祭祀への自氏の関わり方を作り出し主張していく行為の一環として、高橋氏と安曇氏との間で、祀り方をめぐる論争が起こった。大嘗祭や神今食の祭祀において、高橋氏と安曇氏は同じく、神饌を神座のある神殿の入口まで捧げて運ぶという職掌を担う者である。この神饌を捧げて運ぶという祭祀行為のうち、どのような順番で神饌を捧げてならぶかとい

う祀り方の一点が、当の高橋氏と安曇氏との間で問題に上がり論争された。前代からの伝統的な氏の職としての「事」が、祀り方の技術の「技」として、論争の中で展開していったのである。このように高橋氏にとつての九世紀の「宮廷」とは、前代以来もち斎ってきた「事」が、固定した職掌としてあるだけでなく、「技」として他氏との間で論じられ、競い合われ、展開していく場であった。氏文は、この「宮廷」に向かって記述され公開されたテキストである。

氏文が奏上という形式で、公開されるために書かれた公的な文書であるということは、氏の文書と言っても、氏族の内部で氏族のメンバーが内々に読むための私的な文書ではなく、この点に関して、氏文と同じく、家業・職についての由来や技術について記述したテキストである中世の秘事口伝類が、家の当主によってごく内々に管理され書き継がれていったきわめて私的な文書であるのとは、テキストの性格を大いに異にする。しかし、技の競合によって技術的最先端と化した「宮廷」に向かって職——技の起源神話を書くことは、内々で技の洗練・展開を図る秘事口伝類と、技術の自己展開という点では、同じだと言えよう。そこで繰り返されている知識のレベルとは、氏族のメンバーなら誰でも知っているといった氏族の共同伝承では、もはやありえない。氏族の中でも特定の限られた者しか知ることでできない、特別な知識を記述したものである。

このような氏族の共同性からは突出した特別な知識が、記述・公開という表現行為によってつながっている、特異な表現空間——それが、九世紀の「宮廷」である。この九世紀の「宮

廷」とは、だから、氏族の共同性を統合した、より大きな共同性ではない。むしろ氏族の共同性からは突出・飛躍した部分が、自らを表現していくために、向かっていった、表現の契機のようなものである。

それでは、「高橋氏文」が「宮廷」に向かつて展開していった枝と、起源神話とを結ぶ結節点は、具体的にどこにあるのだろうか。そこでいよいよ、「高橋氏文」の起源神話に分け入って、この結節点を探ってみよう。

3 高橋氏とつての「料理」

高橋氏が天皇の御膳や祭祀のときの神饌に関わりをもつことができるのは、始祖の磐鹿六獨命の事績に由来する。この磐鹿六獨命の行ったことに対して、高橋氏は特別な能力として説明する。

此は磐鹿六獨命独りが心のみにあらず。斯ち天坐神の行ひ賜ふものなり。¹⁾

これは、磐鹿六獨命が奉った御食を受け取った景行天皇が、その行為について解き明かした言葉である。それによると、磐鹿六獨命の行った行動とは、彼自身の「心」だけではなく、天坐神の心が入っている、「天坐神の行ひ」だった、ということである。つまり、高橋氏にとっては、御食を「料理」するということは、天坐神の心とつながるための祭祀行為だったということに興味しよう。

ところで、この「料理」というのが、実は、九世紀の宮廷において、神を祀る上での中枢部にもぐり込んでいくほどの、独占的な知識を獲得し所有していった、きわめて戦略的な営みだったのである。そこでまずは、高橋氏文の「料理」に関する部分の叙述を見てみよう。

膾に為り及び煮焼き、雑に造り盛りて、河曲の山梔の葉を見て高次八枚刺し作り、真木の葉を見て枚次八枚刺し作りて、日影を取りて藪にし、蒲の葉を以て美頭良を巻き、麻佐葛を採りて多須岐にかけ帯にし足纏を結びて、供御の雑物を結び飾りて……

まず、「膾に為り及び煮焼き」という、切ったり火を入れたりという調理。それから「河曲の山梔の葉を見て高次八枚刺し作り、真木の葉を見て枚次八枚刺し作り」というのは、御食を盛る器（高次・枚次）を、山梔の葉と真木の葉で綴じ合わせて、それぞれ八個づつ作ったということ。この、御食を盛る器をいかに作るかという行為の孕む技術は、「雑に造り盛りて」という、調理した御食をそれぞれどの器にどのように盛り分けるか、という技術とつながっている。そしてさらに、御食を捧げるときは、装束の各部分について、何でどのように作るか、微細に明かしていく。これは、御食を捧げる、という行為のもつ技術である。

このように、高橋氏とつての「料理」とは、御食をいかに盛り分け、それをいかに捧げて供進するかという、まさに技術

の「技」としてあったのである。そしてこの技は、宮廷祭祀において膳臣（高橋氏の改姓前）や膳部たち料理官が、神饌を作るという行為によって、他の祭祀行為を行う者に対して、より祭祀の中枢部に近づいたための、神についての知識を獲得していく、とつかかりであった。

そこで、神饌を盛り分けるという祭祀行為が獲得する、知識の質について考えるために、『延喜式』という、ほぼ同時代⁽¹²⁾のジャンルの全く異なるテキストをここに持ち出して来よう。「延喜式」とは、おおまかに言って、各官司の行うべき施行細則について記述した法典であるが、祭祀空間としての九世紀の「宮廷」を表現していく様々な活動の一つとして、格式や官儀儀式書の記述という行為も捉えてみようと思う。そうすることにによって、大膳職・内膳司の料理官が「料理」という技をひき上げて、九世紀の宮廷の祭祀にいかにもぐり込んでいったのかを見ることができるのである。

例えば、神饌という視点から見て特異さが浮かび上がる祭祀として、鎮魂祭がある。神祇官齋院で御巫が斎う神八座に大直神一座を加えた九神が、祭場で祀られるが、この神々の神饌は、御飯は御巫が料理し神部が神前に供え、御酒は造酒司が作り神前に自ら供え、その他の神饌は大膳職と内膳司が共同で料理して大膳職が神前に供える。この祭に限っては、大膳職・内膳司が料理した神饌を神祇官が神前に供えるというやり方をとらず、料理から供進までそれぞれが別々に行い、神前でそれぞれの神饌が対面する。このような神饌があり並び立つ祭祀においては、どの神の前に何をどれだけ盛り分けるかという知識が、

祀り方の問題として、祭祀実践者の間の力関係に露出したかたちであらわれてくるだろう。そこで延喜大膳職式の鎮魂祭の条を見てみると、大膳職式・内膳司式全体を通じて、神饌の中身について、群を抜いた詳細な記述である。

座別に東叟十三両（大直神は倍せよ）。鳥賊三両一分（大直神は三両二分を加へよ）。堅魚六両二分（大直神は十三両二分を加へよ）。鮭一雙（大直神は倍せよ）。鯛臈二斤五両。腊三斤二両（大直神は倍せよ）。海藻十両（大直神は十一両を加へよ）。鹽一合八勺、糯米三升、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、生栗子三升、搗栗子二升、干柿子一升二合、橘子二蔭（已上七種は、神四座の菓餅の料。自餘は須ひぎれ）。酒は四座別に醴一口（各一斗を受けよ）。四座別に坩一口（各五升を受けよ）。大直神に一缶（五升を受けよ）。……⁽¹⁴⁾

この神饌の記述の仕方の、どの点の特異かという点、他では神饌全体で使う材料の量がまとめて記述されているのに対し、ここでは「座別に……」とあって、神一座ごとに何をどれだけ盛り分けるかということが、細かく記述されている。それを見ると、神祇官齋院の神八座と大直神とは、例えば、東叟を神八座は十三両で大直神はその倍の二十六両というように、盛り分ける量が異なっている。また、神祇官齋院の神八座のなかでも、糯米・大豆・小豆・生栗子・搗栗子・干柿子・橘子の七種を菓餅の料として奉られる神四座と、奉られない神四座というよう

に、祀られ方に区別がある。さらに御酒に関しては、その区別は、酒を盛る器の違いとしてあらわれる。すなわち、甕に盛られる神四座と埴に盛られる神四座と缶に盛られる大直神、という具合である。

つまり、大直神はもともと別格としても、神祇官齋院の神八座のなかに祀り方の区別があるということについて、知識を獲得できるのは、それぞれの神の前に神饌を盛り分けるという祭祀行為をする者に限つての特権であろう。さらに言うところ、こうした祀り方の区別をあえて作り出し、神々の正体の極秘の部分に身を乗り出していく祭祀実践者へと、自らをしまつていく料理官の感じていた鎮魂祭とは、御飯という神饌を作っている御巫・神部の神祇官サイドの者たちや、歌をうたう者、舞をまう者など、他の諸々の祭祀者たちにとつての鎮魂祭と、およそかけ隔たったものだったかもしれない。神々に対して三通りの相異なる祀り方を、神饌の上で作り出すことによつて、他の祭祀者が感じていたほど均質ではない、もっと変形した祭祀を、一人で勝手に描いていたのではないか。

例えば、延喜式・神祇二（四時祭下）の鎮魂祭の条を見ると、「神八座」の下に、「神魂・高御魂・生魂・足魂・魂留魂・大宮女・御膳・辭代主」と、八神の名前が明記してある。この八神のうち、「魂」が名前についているのは五神で、名前の上から、他の三神とはっきり区別できる。つまり、名前の上からの区別では五神・三神となる。そして、それは同時に、鎮魂の技の神五神（ムスビの神）と、それ以外の三神ということになろう。ところが、にもかかわらず、先に見たように、神饌という祀り

方にあらわれた区別では、四神・四神に分かれる。ここから考えられることは、料理官は、鎮魂の技の神である五神のうちにも、四神・一神という、二通りの区別を作り出していた、ということである。

魂（ムスビ）の神に対して二通りの区別をつけるというのは、近世の国学の方で、高御魂神と神魂神とを、それぞれ男神・女神として分けて解釈したり（平田篤胤）、荒魂・和魂として解釈したりしているが（鈴木重胤）、ここで言う二通りの区別というのは、そのような解釈も生み出すかもしれない契機となる、鎮魂の技そのものへの区別である。つまり鎮魂という技に二通りの区別をつけるわけで、鎮魂の技そのものに深く食い入ることになる。

このように、御食を盛り分けるという祭祀行為によつて、鎮魂祭という祭祀の中枢部にもぐり込み、神そのものを密かに変形しているのである。

以上、延喜式の鎮魂祭の記述を取り上げ、九世紀の宮廷の祭祀において、高橋氏ら料理官の「料理」が、いかに技として展開し力を獲得していたかをみてきた。高橋氏文の中で語られる「料理」とは、単に職掌の「事」の起源としてあるのではなく、このような祭祀の中枢部に食い入るための戦略的な技術の「技」に直結していたのであった。

ところで問題なのは、「料理」という技が、料理官だけの閉じられた技ではなかった、ということだ。九世紀の宮廷において「料理」とは、他の様々な祭祀実践者たちが、そこを指して集まってくる、力関係が露出する地点だった。高橋氏も、「料理」

という技を実践することによって、祭祀実践者たちの競合に引きずり出されていった、というふうに見える。そこで次章では、「料理」をめぐる祭祀実践者たちの表現行為の渦巻く場に、高橋氏文の言説を投げ入れてみよう。

4 神を祭る料理官・料理する祭祀官

御膳神という一つの神格をめぐって、いかに祀るかという祭祀行為の実践が、宮中のあちらこちらで一斉に沸き上がり、それぞれが勝手に自分の御膳神を祭ることが行われた。まずは、その一端をかいま見せる資料を出そう。

『類聚三代格』 天平三年九月十二日

……内膳司の所司、即ち物を採ること、その表を別にせよ。而して阿房之刀自部を召して、膳神を祀らしめよ。但し春秋の祀物は、臨時に取り□□□浄物は恒数に依りて充て行へ。自今以後、永く恒例とせよ。

これは、宮廷で御膳神を祀るに当たって、祭祀担当者や供神物に関して規定した命令の文書（勅）である。この中で、阿房之刀自部を召して御膳神を祀らせてみようと言っているのは、この天平三年の時点で、まだ御膳神の正体・祀り方が把握されていなかったことを意味しよう。宮中に新たに生まれてしまった正体不明の神をいかに祀るかという、まさに祭祀を作り出していくプロセスをかいま見せてくれる資料である。このような状況は、宮廷で自らを「料理」する者として主張していく時、

どのような世界として映っていたのだろうか。

まず、御膳神は、大膳職で祀られているほかに、神祇官齋院に坐す八神のうちの一神として御巫によって祀られ、また大嘗祭では齋国と北野の齋場で御膳八神として、稻実卜部・禰宜卜部によって祀られる。つまり御膳神は、さまざまな祭祀者によって祀られているのである。それは、御膳神をどのような神格としていかに祀るかということが、「料理」という技によって、自分にとっての世界を宮廷の中で作り上げていく祭祀実践者にとって、重要な問題だったからだろう。

このような、御膳神をめぐって祭祀行為が渦巻いているということと、この天平三年の御膳神祭祀に関する格と、さらには延暦年間の高橋氏文とは、無関係であるはずはない。

高橋氏文は高橋氏の職の起源を語ると同時に、大嘗祭の起源も語っている。なぜなら、

十一月の嘗の會も、膳職の御膳の事も、六雁命の勞き始め成る所なり。

とあり、高橋氏にとっては、大嘗祭さえ自分たちが始めたものであるからだ。そして、この大嘗祭を始めるに当たって、

この時、上總国安房大神を御食都神と坐し奉りて……

と、御膳神として上總国安房大神を指定して祀った。これも、高橋氏の論理から言えば、「六雁命の勞き始め成る所なり。」と

いうことになるのだろう。つまり、高橋氏にとつての「料理」とは、御膳神を祀るという行為まで入ってしまうのだ。

ここで、先の天平三年の格に戻ろう。宮廷の御膳神の新たな祭祀を行う者として引つ張り出されてきた、阿房之刀自部。この「阿房之刀自部」とは、名前から考えるに、阿房という土地の神である阿房大神を祀る、女性の（刀自）集団（部）、ということになる。このように宮廷の御膳神の正体を安房大神として祀っていくことは、御膳神に安房大神を指定して祀ることと始めた大嘗祭という、大嘗祭の起源を語る高橋氏にとつて、ぴったり一致する世界像である。あるいは、高橋氏文を記述することと、この御膳神祭祀を作り出すこととは、高橋氏にとつて一続きの表現行為だったのではないか。

しかも、この御膳神の新たな祭祀において、あくまでも「料理」という技によって、神との関係を作り上げていく点に注目したい。すなわち格の中で、「内膳司の所司、即ち物を採ること、その表を別にす。」とある。「表」という語には、手本とか法という意味がある。つまり、神饌の中身を何にするかという選択は、あらかじめ定まっている規定に則る必要はない、と言うか、そのような規定は設けないということではないか。御膳神を祀るための神饌の中身を何にするかは、内膳司の料理官に任されていて、他の者は関知しえないということだ。神饌の材料として何を用いるかということは、神をいかに祀るかという、祀り方そのものを左右する重要な事柄であるはずだ。料理官にとつてみれば、一回一回、神饌の中身を変えることで、自ら新しい御膳神祭祀を作り出すことだできてしまふ。

さらに高橋氏文では、御膳神との関係に関して、注目すべきことを語り出している。

但し安房大神を御食津神とすとは、今、大膳職の祭る神なり。

延喜大膳職式にも「御膳神八座」と出てきて、大膳職の敷地内に御膳神が坐すことはわかるが、この神を誰が祀っているのかまでは記述していない。一方、同じく延喜式で神祇官齋院の神々に関して、「御巫の祭る神八座」「座摩巫の祭る神五座」「御門巫の祭る神八座」「生鳴巫の祭る神二座」とあり、またそれぞれ「□□の斎ひ奉る神の祭」とも書かれ、神を祀る者を明らかにする、記述の仕方がなされている。ここで右の高橋氏文の、「大膳職の祭る神なり。」という記述も、単に御膳神の坐す場所のことを言っているだけではなく、大膳職が自らこの神を祀っていることを主張しているのではないかと考えられる。つまり、神を祭る料理官である。

ところで、御膳神を祀るという点で拮抗していた料理官と神祇官所属の者たちは、さらに「料理」という点でも拮抗していた。すなわち、神祇官齋院で御膳神を祭る御巫は、すでに見たように、鎮魂祭で神饌の御飯を炊いて料理している。また、大嘗祭で祝詞をよむという祭祀行為をする中臣氏は、その中臣の天神寿詞において、天津御食を料理するための天津水についての知識・技術をもっていることを主張している。さらに、大嘗祭で御膳八神を祭る卜部は、亀卜をするときに唱える亀誓とい

う祭文において、天皇の御膳と大嘗祭のときの神饌に最も直接的な関わりをする「技」として、自らの技である亀トを位置づけている。⁽²²⁾

つまり、高橋氏が「神を祭る料理官」だとすると、御巫や中臣氏は、「料理する祭祀官」である。また、高橋氏にとつての「料理」が、神を祭ることまで取り込んでいるのに対し、卜部にとつての「亀ト」とは、天皇や神の御食を作るといふ「料理」までをも取り込んでいると言えよう。

「料理」という視線から九世紀の宮廷を捉えようと、かように、料理官が自分であたかも神を祭る者であるかのように表現したり、反対に祭祀官が自分であたかも料理をする者のように表現したりというように、変身という高速度な表現行為の渦巻く場と化している。高橋や、御巫・中臣・卜部たちは、料理官・祭祀官といった、固定的な肩書のボーダーラインをくぐり抜け、行ったり来たり自由に往来しながら、「料理」といふ技の実践を通して、いわば「宗教者」とでも言うべき存在に、自分自身を変換・変成させていったのである。彼らを「宗教者」と命名するるとき、今まで「料理」を技として論じてきたことの意味も、はつきりしてこよう。すなわち、「料理」が技(テクネー)だといふのは、「料理」によって直接、正体も祀り方もわからない未知なる神々が、こちら側の世界にあらわれ出ようとする瞬間に、立会い接触するからである。⁽²³⁾

さらに、料理官・祭祀官の間を高速度でくぐり抜ける者として、天皇もその一人に挙げられる。ただ天皇の場合、「料理する祭祀官」として饒舌に自らを表現していくのは、中世になって

からである。⁽²⁴⁾ 中世大嘗祭では、天皇と氏々が、祀り方の「技」をめぐって競い合い、その競合の渦中で、天皇は「料理する祭祀官」としての自己の優位性を発見していくのである。

このように、天皇と氏々(家々)が「技」を競い合うということが表立って行われるようになるのは、天皇とそれを取り巻く寺家や諸職の家々といった、中世王権固有のあり方であるが、そのように展開していく端緒として、「料理」をめぐって祭祀実践者たちが競合する、九世紀の宮廷を捉えることができる。そして驚くべきことに、高橋氏文が記述・公開されるきっかけとなった出来事において、高橋氏と安曇氏とが論争するだけでなく、揚句の果てには天皇とこの二氏が、祭祀技術の「技」をめぐって説を出し合い競い合うことが行われた。⁽²⁵⁾ まさに中世の先取りと言えよう。高橋氏文とは、八世紀末から九世紀初めという一時期に特有の、「氏」としての表現行為のかたちを露出させていると同時に、このように、中世の家々の「技」のあり方を先取りしたテキストであった。

高橋氏文の向こうには、すぐもうそこまで、中世は来ている。決して、アナクロニズムの書ではない。

(注1) 文献化された「歴史」群の中で、いかに「正しき」を獲得していくかということをも、「文字わざ」として論じたものに、津田博幸『偽書』づくりのわざ——先代旧事本紀をめぐって——(一九九四・八、夏季セミナー口頭発表)がある。

(2) 古橋信孝『古代都市の文芸生活』第三章「鎮魂論」(大修

館書店、一九九四)。万葉集の挽歌が、長屋王を最後にして大伴氏関係のものだけになるといふ偏りについて、歌が氏関係の内部で、氏々のものとして詠まれるようになったことを指摘する。

- (3) 義江明子『日本古代の氏の構造』第二編「氏と氏神」第一章「橋氏の成立と氏神の形成」、第二章「平野社の成立と変質」、第三章「春日祭祝詞と藤原氏」、補論「古代における『私』の成立——『私氏神』をめぐる——」。(吉川弘文館、一九八六)

- (4) 複数説の注釈書の早い時期のものとして、仏典注釈の方で、八世紀初期の『三経義疏』がある。山口敦史「八世紀の三経義疏における『私』説」(一九九四・八、夏季セミナー口頭発表)は、この「私」が八世紀に聖徳太子と結びつき「上宮王私集」とされたという、「私集」(私に集むる)の意味について考察している。

なお、『高橋氏文』引用の太政官符では、「国史」である「日本紀」に対し、高橋氏や安曇氏の氏サイドのテキストは、「氏記」「私記」「家記」「私記文」と呼ばれている。

- (5) 工藤隆「危機意識としての古事記(1)——絶対始源への意志と神祇令への違和——」(『大東文化大学紀要』第二十九号、一九九〇・三)

- (6) 多田一臣「高橋氏文」(『古代文学』第二十一号、一九八二・三)

- (7) 岡田荘司「天皇祭祀と国制機構——神今食と新嘗祭・大嘗祭——」(『国学院雑誌』九十一巻七号、一九九〇・七『大嘗の祭り』学生社)

- (8) 早川万年「高橋氏文成立の背景」(『日本歴史』五三二号、

一九九二・九)は、内膳司官人としての高橋氏・安曇氏の争論も、こうした祭祀への関わり方をめぐって生じたことに注目し、高橋氏・安曇氏にとっては、律令の官位制秩序よりもむしろ、天皇親祭祭祀の場で天皇に近侍・供奉するという職のあり方にこだわっていったことを指摘する。

- (9) 『高橋氏文』が引用する太政官符にこの出来事は記述されている。この論争が祭祀の技をめぐる競合の問題として考えられるということについて、拙稿「論争する氏と天皇——『高橋氏文』の祭祀技術と起源神話——」で論じた。

(慶応義塾大学文学部紀要『藝文研究』、一九九五・六、予定)

- (10) 『高橋氏文』引用の太政官符や「古語拾遺」序は、天皇の召問に応じて記述・奏上するという経緯を明かしている。

- (11) 以下、高橋氏文の起源神話本文の引用はすべて、『神道大系』古典編13に所収の原文を私に訓み下した。

- (12) 延喜式の編纂は厳密には十世紀初頭であるが、延暦交替式・弘仁式・貞観式というように、九世紀初めから続いた一連の法典編纂事業を一まとまりのものとして捉え、その中でテキスト全体が現存するものとして、延喜式を取り上げる。

- (13) 大膳職と内膳司とは、通常は神饌作りにたずさわるのは内膳司の方であり、両方が共同で料理し(職司料理し神祇官とともに供へよ。——『延喜式』大膳上)大膳職が神前に供えるというのは、他の宮廷祭祀と較べて特異である。本稿では大膳職と内膳司とをひっくり返るため料理官とし、神祇官に所属する御巫や神部や卜部といった祭祀官とこの料理官との競合をみようとしたものであるが、料理官の中で

も高橋氏と安曇氏とが、ある時に祭祀技術をめぐる競合を起こしたように、大膳職と内膳司との間にも競合の表現行為がせりあがっている一瞬をキャッチできるかもしれない。稿を改めたい。

(14) 『延喜式』卷三十二・大膳上。国史大系本を私に訓み下した。以下の延喜式引用も同じ。

(15) 御巫が舞をまい、それを神部(巫部)が囃し、また御巫が覆した字氣槽の上で鉦を撞き、十回撞くことに神祇伯が木綿鬘を結び、その後さらに御巫たちや猿女が舞をまう——といった祭祀行為について、折口信夫は天皇に新たな靈魂を付着するタマリとして捉え、岩田勝は悪靈強制制として捉える(『神楽新考』名著出版、一九九二)。このような、「鎮魂」とは何か、または鎮魂祭の目的は何かといった問いの立て方とは別に、高橋氏のような神饌作りという祭祀行為をする者にとって、鎮魂祭とはどのような世界として映っていたのかという、ある意味では、非常に限定されたヴィジョンのもっている歪みの質を見てもよいというのが本稿のねらいである。つまりそれは、当事者の側に立つということである。

(16) 『類聚三代格』卷十・供御事。国史大系本を私に訓み下した。

(17) 『延喜式』卷三十二・大膳上に「御膳神八座」とある。

(18) 『延喜式』卷九・神祇九の神名上。「神祇官西院坐御巫等祭神二十三座」の中に、「御巫祭神八座」とあり、その内訳は、「神産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大宮賣神、御食津神、事代主神」。

(19) 『延喜式』卷七・神祇七の踐祚大嘗祭。本文「於齋院祭

神八座」の割注で、「御歳神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比岐神」と、八神の神名を明かす。この八神を指して別の箇所では「御膳八神」と称す。

(20) 『延喜式』卷九・神祇九の神名上。

(21) 『延喜式』卷二・神祇二の四時祭下。

(22) 『新撰龜相記』の「龜誓の本辞を述ぶる一條」に、「略述」という記述方法で採録されている。それによると卜部の職の起源は、天孫降臨に際して卜占の術をもって皇御孫尊の御膳の事に奉仕するというものであった。

(23) 古代ギリシア哲学の元初的思索では、覆い隠されていたものから立ち現れてくること(「ピュシス」という世界把握を核としており、その覆蔵から非覆蔵への関わり方として、「テクネー」があった。すなわち、「非覆蔵の場のその都度の範囲を予め用意し、用意を保持しておくこと」、である。(ハイデッカー「ヘラクレイトス」、全集第55巻、創文社)

(24) 『後鳥羽院宸記』『伏見院宸記』など、中世では天皇が自ら、大嘗祭で自分の行う祭祀の技について記述し、テキストを作っていました。

(25) 注(10)の論文「論争する氏と天皇——『高橋氏文』の祭祀技術と起源神話——」で、中世大嘗祭の問題とつなげて論考した。